ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20
ユーラシア諸言語の多様性と動態－20 号記念号－
ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018 年 3 月発行
Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume
The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

日本語とトルコ語におけるイントネーションの機能に関する一考察　－文タイプの区別に着目して－

On the Functions of Intonation in Japanese and Turkish: Focusing on Sentence Types

佐藤久美子
SATO, Kumiko

日本語とトルコ語におけるイントネーションの機能に関する一考察
—文タイプの区別に着目して—

佐藤 久美子
satok@ninjal.ac.jp

イントネーション、文タイプ、意味的焦点、日本語諸方言、トルコ語

1. はじめに

イントネーションの意味・機能として注目されるのは、文タイプの区別、意味的焦点の表示、話者の発話態度の表出など[1]である。本論文では、特に、イントネーションと文タイプの相互関係に着目し、日本語とトルコ語の共通点と相違点を探る。日本語諸方言の研究では、上述の三つの意味・機能を示す文レベルでの音声現象が記述され、それぞれの方言に固有の特徴が指摘され、方言間のバリエーションが明らかになりつつある。いくつかの方言においては、文末のイントネーションが文タイプの区別や話者の発話態度の表出という機能を担っていることが報告されている。例えば、東京方言では、疑問文に代表される「聞き手に回答を要求する文」は、そうでない文とは異なる文末イントネーションが実現することが以前より指摘されている (郡 2003 など)。一方で、文末イントネーションは文タイプを区別するだけでなく、方言によっては、丁寧さや聞き手への配慮といった話者の発話態度の表出という役割を持っていることも報告されている。また、イントネーションは文中の意味的焦点の表示という機能を持ち、疑問文では疑問詞でピッチのピークが上昇したり、その前後でピッチのピークが低くなったりといった現象が観察される。

一方、トルコ語では、近年、イントネーションと文タイプの相互関係について興味深い二つの指摘がなされている (Kawaguchi, Yılmaz and Yılmaz 2006, Göksel, Kelepir and Üntak-Tarhan 2008, 2009)。いずれも日本語と同様、「聞き手に回答を要求する文」には特別なイントネーションが生じることを明らかにしたものあるが、一つは文末のイントネーションに注目し、もう一つは文頭から始まるイントネーションに注目している。

以下では、イントネーションの意味・機能として上述した三つを念頭に置き、東京方言を含む日本語のいくつかの方言とトルコ語の比較・対照を行う。本論文の目的は、そ

---

[1] イントネーションの重要な機能として、統語構造の明示も挙げられるが、これについては本論文では議論の対象としない。

れらの比較・対照を通じて、トルコ語において提案されている二つの分析の問題点を整理し、解決のための課題を示すことである。2 節では、東京方言を中心とした日本語諸方言におけるイントネーション研究を概観する。3 節では、トルコ語において提案されているイントネーションと文タイプの相互関係について詳述し、その問題点を述べる。4 節では、日本語諸方言との共通点と相違点を探りながら、トルコ語研究の問題点を解決するための新たな分析案を示す。最後に、5 節では、本論文のまとめと今後の課題を述べる。

2. 日本語諸方言におけるイントネーション研究の概観

日本語諸方言の研究で、文タイプや話者の発話態度が文末イントネーションによって示されることが明らかになっている。文タイプとは、聞き手に回答を要求する文や話し手の意志を伝達する文のことを指す。前者の典型は疑問文、後者は平叙文（断定文）である。本節では、文末イントネーションに関する議論を始める前に、本論文を通して取り上げられる疑問文全体に生じる特徴的なピッチパターンを確認する。続いて、文末イントネーションの意味・機能について述べる。

2.1. 疑問文におけるピッチパターン

東京方言では、文中に疑問詞や対比の表現などの意味的な焦点を含むとき、(1)のピッチパターンが生じる。

(1) ピッチのピークの上昇と圧縮：東京方言 (Ishihara 2003)
文中に焦点があるとき、その要素のピッチのピークが上昇する。そして、それより後ろでピッチのピークが圧縮[2]される。

(2a)は平叙文、(2b)は疑問文の例である。疑問文では文の焦点である疑問詞のピッチのピークが上昇している。また、平叙文ではそれぞれの文節に語の語彙的アクセントが実現しているが、疑問文では、疑問詞より後ろでアクセントは保持されているものの、ピッチのピークが圧縮されている。ピッチのピークの上昇が生じる要素を太字で、ピッチのピークの圧縮が生じる部分を下線で示す。（以下の引用文中の例文番号、例文の表記、グロス、訳文は本稿にあわせて改変した。また、下線や太字などは佐藤による。）

(2) a. Naoya-ga nanika-o nomiya-de nonda 「なおやが何かを飲み屋で飲んだ」
b. Naoya-ga **nani-o** <u>nomiya-de nonda no</u>?「なおやが何を飲み屋で飲んだの？」

[2] ピッチのピークの圧縮とは、ピッチのピークの低まりを意味する。Ishihara (2003)では、Post-Focus Reduction と呼ばれている。

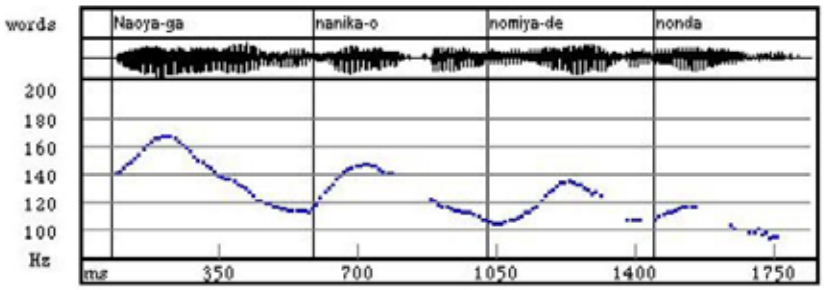

図 1　(2a)の F0 曲線 (Ishihara 2003)

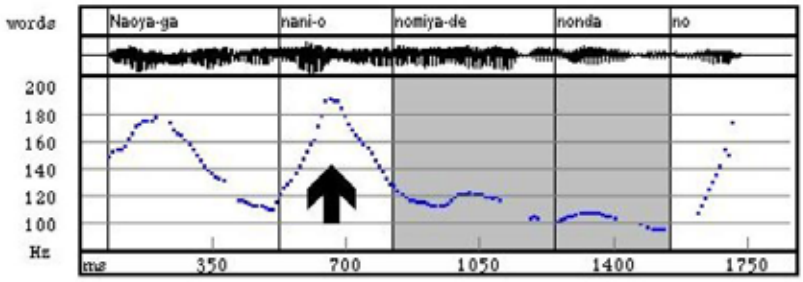

図 2　(2b)の F0 曲線 (Ishihara 2003)

東京方言とは異なり語彙的アクセントを持たない方言においても、類似したピッチパターン(3)が生じる。

(3)　なだらかな下降：小林方言 (佐藤 2005、Igarashi 2006)
文中に焦点があるとき、それより後ろでなだらかな下降が実現する。

(4a)の平叙文では「一型アクセント」が実現し、各文節の最終音節に高いピッチが生じているが、(4b)の疑問文では、疑問詞より後ろではそれが実現せず、なだらかな下降が生じている。

(4)　a.　Naoya-ga biiru nonda do　　「なおやがビールを飲んだよ」
　　b.　**Dai-ga** biiru nonda toke　　「誰がビールを飲んだの？」

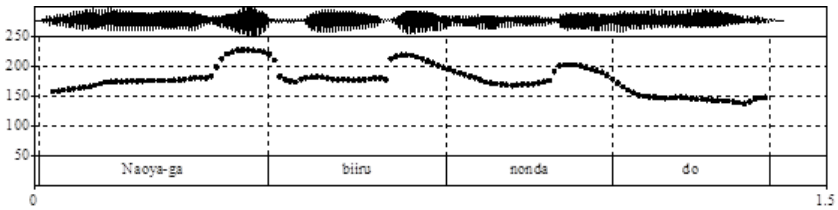

図 3　(4a)の F0 曲線 (佐藤 2011)

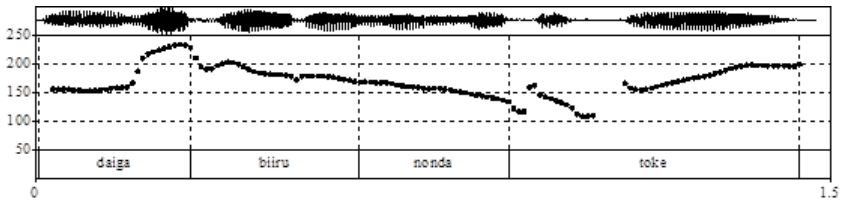

図4　(4b)の F0 曲線 佐藤 (2011)

2.2. 文末イントネーションの機能

東京方言の文末イントネーションの研究は多くあるが、その分類は研究者により様々で一致した結論は出ていない。しかし、文タイプの区別という点から見ると、(5)は共通して認められている。

(5)　上昇調[3]は聞き手に回答や反応を求める機能を持つ。

(郡 2003)

下の(6a)は、文末詞「カ」を伴った疑問文であり、一方、(6b)は形式的には平叙文とされる。いずれも文末に上昇イントネーションが実現する場合、聞き手に回答を求める文と解釈される。以下、「↑」で上昇調を、「↓」で非上昇調を表す。

(6)　a.　太郎は来ましたか↑
　　b.　太郎は来ました↑

(6a)と同じく、文末詞「カ」を伴う疑問文であっても、文末イントネーションが上昇調でなければ、その文が聞き手に回答を求める文とは解釈されない。

(7)　太郎は来ましたか↓

(7)は質問をするという場面では用いられない。これは、話者が既に「太郎が来た」ことを知っている場面で発話される。仁田 (1991)は、このような表現を「自問納得」と呼んでいる。

以上のような現象に基づき、東京方言では、文タイプを区別する機能を文末イントネーションが担っていると考えられている。ただし、日本語諸方言を見ると、文末イントネーションが必ずしも文タイプの区別に役立たないことが分かる。例えば、木部・久見木 (1993)や小西 (2016)は、それぞれ、鹿児島方言、富山方言では文末の上昇調が文タイプを区別する機能を持たないことを指摘している。

[3] 上昇調の意味・機能については、以前より多くの記述がある。例えば、金田一 (1951)や川上 (1963)では、上昇によって「相手とのつながりを求める気持ち」が表されると述べられている。これらも(5)に矛盾しない。

鹿児島方言の疑問文では通常、平叙文と同じく、文末に非上昇調が実現する。

(8)　アヤ アメ ナ↓　　「あれは飴ですか」
(木部・久見木 1993, p. 24, 表 1 より抜粋[4])

もう一つ、鹿児島方言が東京方言と異なるのは、一つに、文末には必ず「ナ」「カ」「ヤ」「ケ」といった文末詞を伴うことである。木部・久見木 (1993)は、鹿児島方言では、これら文末詞があることによって、当該の文が回答を要求する文であることが示されると述べている。

また、木部・久見木 (1993)によれば、鹿児島方言の文末イントネーションは、話し手の発話態度を表す。疑問文、平叙文ともに、文末に上昇調が実現する場合、それは聞き手に対してより配慮のある親切な伝達を表すと述べられている[5]。

以上、東京方言と鹿児島方言の研究を概観することで、文末イントネーションには言語によって異なる機能があることを確認した。そして、上昇調・非上昇調といった文末イントネーションが、文タイプを区別する機能を持ったり、話者の発話態度を表出する機能を持ったりすることを見た。

3. トルコ語

トルコ語のイントネーション研究として、Kawaguchi, Yılmaz and Yılmaz (2006), Göksel, Kelepir and Üntak-Tarhan (2008, 2009)を取り上げる。これら二つの研究はいずれも文タイプとイントネーションの関係を論じたものであるが、それぞれ異なる現象に注目し、分析を行っている。両者の議論を見る前に、二つの研究において共通して扱われているトルコ語の疑問文について簡単に説明する。

3.1. トルコ語の疑問文の特徴

トルコ語には *kim*（誰）、*ne*（何）、*nasıl*（どのように／どのような）、*hangi*（どれ／どの）、*niçin*（どうして）などの疑問詞を含む疑問詞疑問文と、疑問の付属語*-mI* を含む真偽疑問文がある。*-mI* は文末だけでなく、文中にも表れ、その場合、*-mI* のホストとなる要素が意味的焦点として解釈される。

(9)　a.　疑問詞疑問文
Bura-ya　*kim*　gel-di?
ここ-DAT　誰　　来る-PAST.3sg
「ここに誰が来たの？」

---

[4] 木部・久見木 (1993)ではモーラごとに高低が表されている。本論文では語彙的なアクセントは扱わず、文末のイントネーションのみを表す。
[5] 木部 (2000)では、「不審の度合いが強い」「回答を求める度合いが強い」とも述べられている。

b. 真偽疑問文

Bura-ya Gizem gel-di *mi*?

ここ-DAT ギゼム.NOM 来る-PAST.3sg Q

「ここにギゼムは来たの？」

Bura-ya Gizem *mi* gel-di?

ここ-DAT ギゼム.NOM Q 来る-PAST.3sg

「ここにギゼムが来たの？（ここに来たのはギゼムなの？）」

音声的特徴として、(10)のことが観察される。

(10) 疑問文のピッチパターン (Göksel et al. 2008, 2009, 佐藤 2011, 2013)

a. 文中に意味的焦点（疑問詞、*-mI* のホストである要素など）があるとき、その要素のピッチのピークが上昇する。

b. 焦点より後ろにピッチのなだらかな下降が生じる。

c. 焦点より前にピッチの圧縮が起こり、平らなピッチが生じる。

(11a)は平叙文、(11b)は文頭に疑問詞がある文、(11c)は動詞の直前に疑問詞がある文である。例の下にそれぞれの F0 曲線を図に示す。(11a)では、各語にアクセントが実現している。(11b)では、文頭の疑問詞より後ろになだらかな下降が生じ、(11c)では、疑問詞より前にピッチの圧縮が生じている。疑問詞の前に生じるピッチの圧縮とそれに伴う平らなピッチを波線で表す。

(11) a. Anne-m haber-i baba-m-a söyle-miş.

母-POSS.1sg.NOM ニュース-ACC 父-POSS.1sg-DAT 話す-PF.3sg

「母はそのニュースを父に話した」

b. **Kim** haber-i baba-m-a söyle-miş?

誰.NOM ニュース-ACC 父-POSS.1sg-DAT 話す-PF.3sg

「誰がそのニュースを父に話したの？」

c. Abla-m-ın bura-ya gel-diğ-i-ni baba-m-a **kim** söyle-miş?

姉-POSS.1sg-GEN ここ-DAT 来る-COMP-POSS.3sg-ACC 父-POSS.1sg-DAT 誰.NOM 話す-PF.3sg

「姉がここに来たことを父に誰が話したの？」

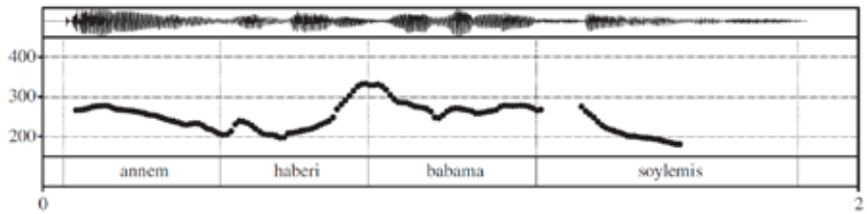

図 5　(11a)の F0 曲線（佐藤 2011）

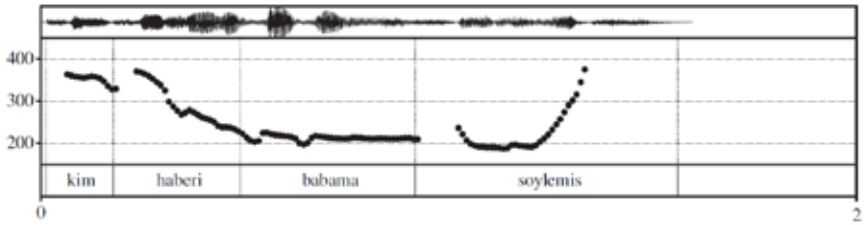

図 6　(11b)の F0 曲線（佐藤 2011）

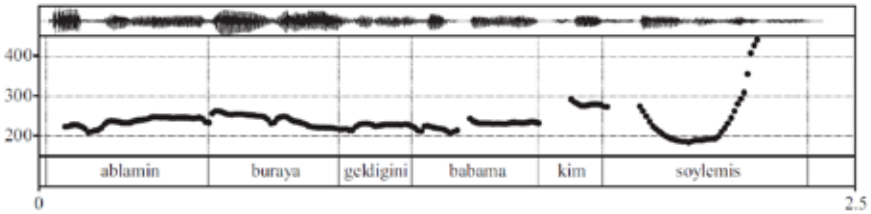

図 7　(11c)の F0 曲線（佐藤 2011）

3.2. 文タイプと文末のイントネーション (Kawaguchi, Yılmaz and Yılmaz 2006)

本節では、トルコ語の文末イントネーションを見る。Kawaguchi et al. (2006)はトルコ語の準自然会話コーパス[6]からデータを収集し、疑問文のイントネーション、特に文末のイントネーションを詳細に記述している。そして、文末イントネーションには文タイプを区別する機能があることを論じている。まず、トルコ語の疑問文の文末イントネーションを「高平調 (high-flat pitch)」「上昇調 (rising glissando)」「低平調 (low-flat pitch)」「下降調 (lowering glissando)」の四つに分類し、それらの意味・機能について以下のように指摘した。なお、下降調は文タイプとは関係がなく、話し手の発話態度に関わるイントネーションであると考えられている。

(12)　a.　高平調は聞き手への情報要求という意味を持つ。
　　b.　上昇調は聞き手への行動要求という意味を持つ。
　　c.　低平調は話し手の意志伝達という意味を持つ。
　　d.　下降調は話し手の感情の表出

[6] 東京外国語大学が開発したインターネット上の言語教材 (http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/tr/dmod/)

(12)は、東京方言の (5)と矛盾しない。(5)では、高平調と上昇調を区別せず、どちらも「上昇調」と呼んでいるが、「聞き手に回答や反応を求める」という点では、(12a, b)と同じである。

以下では、まず、疑問詞疑問文における文末イントネーションの実現を見ていく。疑問詞疑問文には、高平調、上昇調、低平調の三つのイントネーションが観察されている。39 例中、高平調が 19 例、上昇調が 11 例、低平調が 9 例である。

(13) a. 高平調

Ne ol-du?

何 なる-PAST.3sg

「どうしたの？」 (Kawaguchi et al. 2006, p. 352)

b. 上昇調

Bak şu karşıdaki yüksek bina-yı gör-üyor mu-sun? — *Hangi* bina?

見る.IMP. その 向かいの 高い ビル-ACC 見る-IMPF Q-2sg どの ビル

「見ろ。その向かいの高いビルを見ているか？」「どのビル？」

(Kawaguchi et al. 2006, p. 356, [5])

c. 低平調

Dün beni *niçin* ara-ma-dı-n?

昨日 私.DAT なぜ 電話する-NEG-PAST-2sg

「昨日私にどうして電話しなかったの？」(Kawaguchi et al. 2006, p. 359, [12])

このうち、上昇調と低平調が生じる文脈には一定の特徴が見られることが指摘されている。上昇調は、すでに談話に導入されたものを特定するために、聞き手に命令的に返答を求めるような文脈で用いられるという。低平調は、典型的には断定文（話し手の意志を伝達する文）に生じるイントネーションである。(13c)は疑問詞を含む疑問詞疑問文ではあるが、「擬似平叙文」と呼ばれ、回答要求のない文であると考えられている。低平調が生じる文として、(13c)のような発話の他にも、(14)のような例が挙げられている。(14)は単なる挨拶であり、聞き手の体調を尋ねる文ではないとされる。

(14) 低平調

Nasıl-sın?

どのような-2sg.

「（ご機嫌）いかがですか」 (Kawaguchi et al. 2006, p. 359, [13])

次に、真偽疑問文のイントネーションを見ていく。真偽疑問文に生じる文末イントネーションは高平調、上昇調、低平調、下降調の四つに分類される[7]。42 例中、高平調 7

[7] 高平調と上昇調は-*mI* のホストである要素にピッチの上昇がない場合に観察されることが述べられ

例、上昇調が 2 例、低平調が 21 例、下降調が 7 例となっている。以下に例を挙げる[8]。

(15) a. 上昇調

Yarın akşam sinema-ya gid-elim mi? ― Yarın akşam *mı*?
明日 晩 映画館-DAT 行く-OPT.1pl Q 明日 晩 Q
「明日の晩映画館に行きましょうか ― 明日の晩ですか」
(Kawaguchi et al. 2006, p. 363, [26])

b. 低平調

Şu an-da müsait *mi*-sin?
その 時-LOC 都合が良い Q-2sg
「今、都合が良いですか？」 (Kawaguchi et al. 2006, p. 360, [14])

c. 下降調

Seney, duy-du-n *mu*?
セネイ 聞く-PAST-2sg Q
「セネイ、聞きましたか？」 (Kawaguchi et al. 2006, p. 362, [21])

上昇調を伴う(15a)は(13b)と同様に、すでに談話に導入されたものを特定するために、聞き手に命令的に返答を求めるような文脈で用いられている。低平調を伴う(15b)については、(13c), (14)と同様に、断定文との親和性に言及されているが、具体的な議論はない。下降調を伴う(15c)は、疑問と感嘆が混在する話し手の感情を表現していると説明する。

以上、Kawaguchi et al. (2006)に基づき、トルコ語では文末イントネーションが文タイプを区別する機能を持つこと、また、その一部は話し手の感情を表す機能を持つことを見た。

3.3. 文タイプと文頭イントネーション (Göksel, Kelepir and Üntak-Tarhan 2008, 2009)

Göksel et al. (2008, 2009)は、Kawaguchi et al. (2006)とは異なり、文頭から始まるイントネーションに注目し、それが文タイプの区別に関与していると主張する。

(16) ピッチのピークの圧縮は回答要求という意味を表す。

この圧縮は、文頭から、疑問詞疑問文では疑問詞のピッチのピークの上昇までに、真偽疑問文では*-mI* のホストのピッチのピークの上昇までに生じることが観察されている[9]。

ている。

[8] Kawaguchi et al. (2009)では、高平調の例は挙げられていない。

[9] Göksel et al. (2008, 2009)では、回答を要求する文として、疑問文以外にも、モーダル副詞である *hani* と *sakın* を含む hani 節と sakın 節も取り上げられている。いずれも文頭からピッチのピークの圧縮が生じることが報告されている。*hani* は話し手と聞き手が共有する情報を思い起こさせる機能を持つとさ

このことを示す例として、(17)の例が示されている。(17a)は回答を要求しない平叙文、(17b, c)は回答を要求する疑問文である。文頭のピッチのピークの圧縮は(17b, c)に生じる。

(17) a. 平叙文

Aynur-un Almanya-dan dön-düğ-ün-ü bil-iyor-du.

アイヌル-GEN ドイツ-ABL 戻る-COMP-POSS.3sg-ACC 知る-IMPF P.COP.3sg

「アイヌルがドイツから戻ったことを知っていました」

(Göksel et al. 2009, p. 254, (7))

b. 疑問詞疑問文

Aynur-un Almanya-dan dön-düğ-ün-ü **nasıl** bil-iyor-du-n?

アイヌル-GEN ドイツ-ABL 戻る-COMP-POSS.3sg-ACC **どうやって** 知る-IMPF-P.COP-2sg

「あなたはアイヌルがドイツから戻ったことをどうやって知っていましたか」 (Göksel et al. 2009, p.259, (10))

c. 真偽疑問文

Aynur-un Almanya-dan dön-düğ-ün-ü **bil-iyor** mu-ydu?

アイヌル-GEN ドイツ-ABL 戻る-COMP-POSS.3sg-ACC 知る-IMPF Q-P.COP.3sg

「アイヌルがドイツから戻ったことを知っていましたか？」

(Göksel et al. 2009, p. 254, (6))

更なる例として、Göksel et al. (2008)は、直接疑問文と間接疑問文における文頭イントネーションの違いを挙げている。回答を要求する直接疑問文では文頭にピッチのピークの圧縮が生じるが、回答を要求しない間接疑問文ではそのような現象は生じないと述べられている。

れる。下の例は、聞き手が当該の事実を知らないことに対する話し手の驚きを表現している。hani 節と sakın 節の例で挙げられている訳はいずれもそれぞれのモーダル副詞の意味機能を分かりやすく表したものである。

hani 節： Aynur-un Almanya-dan dön-düğ-ün-ü **hani** bil-iyor-dun.

アイヌル-GEN ドイツ-ABL 戻る-COMP-POSS.3sg -ACC hani 知る-IMPF-P.COP-2sg

「あなたがアイヌルがドイツから戻ったことを知っていたと思っていたのに」

(Göksel et al. 2009, p. 259, (11))

sakın は当該の命題が事実であるかもしれないという話し手の不安を表すとされる。

sakın 節： Aynur Almanya-dan dön-müş **ol-ma-sın** *sakın*!?

アイヌル.NOM ドイツ-ABL 戻る-PF AUX-NEG-3OPT sakın

「アイヌルがドイツから戻って来ていたとしたらどうしよう」

(Göksel et al. 2009, p. 265, (23))

(18) a. 直接疑問文

Meral Ali-nin **ne-yi** al-dığ-ın-ı düşün-üyor?

メラル.NOM アリ-GEN 何-ACC 買う-COMP-.POSS.3sg -ACC 考える-IMPF.3sg

「メラルはアリが何を買うと考えているの？」

(Göksel et al. 2008, p. 9, (13a))

b. 間接疑問文

Meral Ali-nin ne-yi al-dığ-ın-ı düşün-üyor.

メラル.NOM アリ-GEN 何-ACC 買う-COMP-.POSS.3sg -ACC 考える-IMPF.3sg

「メラルはアリが何を買うのか考えている」

(Göksel et al. 2008, p. 9, (13b))

文末のイントネーションに関しては、Göksel et al. (2008, 2009)では、回答要求の下位分類である疑問詞疑問文と真偽疑問文を区別するものとして考えられている。疑問詞疑問文では上昇し、真偽疑問文では下降する。

3.4 トルコ語についての二つの主張の問題点

前節では、トルコ語の二つの研究を取り上げ、文末イントネーションが文タイプを区別する機能を持つという主張と、文頭イントネーションが文タイプを区別するという主張があることを見た。本節では、両者にとって問題となる点を指摘する。まず、Göksel et al. (2008, 2009)を見る。以下では彼らの主張にとって問題であると思われる点を二つ挙げる。

一つ目は、ピッチのピークの圧縮は、回答を要求する文だけに見られるものではない可能性があるいう点である。(19)は筆者の調査によって得られたデータである。(19)は疑問詞を用いた、回答を要求しない反語文である。このような文にもピッチのピークの圧縮が生じることがある。

(19) 反語文

Aynur-un Almanya-dan dön-düğ-ün-ü **nasıl** bil-eyim.

アイヌル-GEN ドイツ-ABL 戻る-COMP-POSS.3sg-ACC どうやって 知る-OPT.1sg

「アイヌルがドイツから戻ったことを、私がどうして知ろうか」

(19)の文末には低いイントネーションが実現し、これはKawaguchi et al. (2006)が指摘する疑似平叙文に含まれるものだと考えられる。Göksel et al. (2008, 2009)の主張に基づけば、回答を要求しない疑似平叙文にはピッチのピークの圧縮は生じないことを予測するが、(19)はこの予測と合致しない。Göksel et al. (2008, 2009)では、疑似平叙文についての議論

は行われておらず、今後の課題とされているが[10]、(19)の事実は彼らの主張にとって問題となるはずである。更に、筆者の得たデータでは、Göksel et al. (2009)が挙げている(18b)とは異なり、回答要求のない間接疑問文においてもピッチのピークの圧縮が見られることがあった。

二つ目の問題は、回答を要求する文の典型である疑問文においてもピッチのピークの十分な圧縮が見られないことがある、という点である。筆者の調査でも、疑問文の多くにピッチのピークの圧縮が見られた。ただし、その程度は様々で、完全に圧縮されてしまい、ほぼ平らになる場合から、圧縮が非常に弱い、あるいはほとんど起こらず、平叙文と変わらないように見えるものまであった。Göksel et al. (2009)は、文頭のイントネーションのみを聞かせて、それが疑問文であるかどうかの判断をさせる聴覚実験を行っている。その結果、正答率は62%に留まった。文タイプの判断としなかったことが正答率の低さにつながったとしているが、圧縮の程度が問題となっている可能性も考えられる。

ただし、以上の問題点に関しては、なぜこのようなデータの違いが生じているのか明らかでなく、これらがGöksel et al. (2008, 2009)の主張の反例であるとは断言できない。更なる調査、分析が必要である。

続いて、Kawaguchi et al. (2006)にとって問題と思われる点を述べる。トルコ語では、疑問詞疑問文と真偽疑問文では、典型的な文末イントネーションが異なる。Kawaguchi et al. (2006)がデータとして用いたコーパスでもその違いは明らかである。疑問詞疑問文では高平調と上昇調が、真偽疑問文では低平調と下降調が多数を占めている。同じ回答要求文である疑問文にこのような違いがあるのはなぜなのか。また、Kawaguchi et al. (2006)では、低平調は「話し手の意志伝達という意味を持つ」とされ、トルコ語では断定文に生じるイントネーションである。真偽疑問文42例中21例に生じる低平調を回答要求のない文であると見なすことは不自然である。Kawaguchi et al. (2006)の主張を保持するためには、真偽疑問文の文末イントネーションに対して説得的な説明が必要である。

4. 日本語とトルコ語の比較：トルコ語における問題解決の可能性

本節では、これまでに見てきた日本語の研究とトルコ語の研究を比較し、両言語の共通点と相違点を述べる。現時点では、トルコ語における二つの主張の妥当性を十分に検証するには至っていないが、いずれの主張も、トルコ語と東京方言の共通点を明らかにしている。それは、両言語では、音声的な標識が文タイプを区別する機能を担っているという点である。このような共通点に着目し、日本語とトルコ語の比較を通じて、3.4節で述べたトルコ語の問題を解決するための分析の可能性を述べる。

4.1節では、日本語と比較しながら、トルコ語の文末イントネーションの特徴を整理する。そして、4.2節では、トルコ語と類似した文頭のイントネーションが東京方言でも見られることを報告したHwang (2016)の研究を紹介し、そこでの分析がトルコ語にも適用可能であることを示す。

---

[10] 論文中にも今後の課題として言及されている (Göksel et al. 2009, p. 272, 脚注18)。

4.1 文末イントネーションについて

2.2 節では、東京方言と鹿児島方言の先行研究に基づき、文末イントネーションが文タイプ、特に回答を要求する文であるか否かを区別する機能を持つ言語と持たない言語があることを確認した。東京方言は前者、鹿児島方言は後者である。そして、鹿児島方言では、イントネーションの代わりに、文末詞によって回答要求文であることが示されることを述べた。

一方、トルコ語では、疑問詞疑問文に限れば、東京方言と同様に、文末イントネーションが文タイプを区別する機能を持つと言える。Kawaguchi et al. (2006)の記述によれば、疑問詞疑問文では、文末のイントネーションによって回答要求文であるかどうかが区別されている。例えば、(20a)は単純な質問と解釈されるが、それに対して、(20b)は質問というより、むしろ「あなたは電話すべきだった」という話者の意志を伝達する文として解釈されるだろう。

(20) a. *Niçin* ara-ma-dı-n ↑
なぜ 電話する-NEG-PAST-2sg
「どうして電話しなかったの」
b. *Niçin* ara-ma-dı-n ↓
なぜ 電話する-NEG-PAST-2sg
「どうして電話しなかったの」

トルコ語の真偽疑問文は疑問詞疑問文とは異なり、その典型的な文末イントネーションは断定文と同様に下降である。文タイプの区別は、*-mI* という形態の有無によって示されていると考えられる。(21)はどちらも文頭の *Gizem* が意味的焦点となる要素であり、この要素にピッチのピークの顕著な上昇が生じている[11]。両者にはイントネーションを含め声の高低に関する違いはなく、*-mI* の有無によってのみ区別される平叙文と疑問文である。

(21) a. **Gizem** gel-di ↓
ギゼム.NOM 来る-PAST.3sg
「ギゼムが来た」
b. **Gizem** *mi* gel-di ↓
ギゼム.NOM Q 来る-PAST.3sg
「ギゼムが来たの？」

このような事実から、トルコ語の真偽疑問文については、鹿児島方言との類似性がう

[11] 真偽疑問文の特徴として、*-mI* のホストである要素にピッチのピークの顕著な上昇が観察されることを述べたが、断定文であっても、文中に意味的な焦点となる要素を含んでいる場合、その要素に同様の現象が観察される。(21a)は「誰が来たの？」の回答となる文である。

かがえる。鹿児島方言では疑問文専用の文末詞があり、その文末詞を伴うことによって当該の文が疑問文であることが示される。上で見た通り、トルコ語においては*-mI* によって(21b)が疑問文であることが示されている。

ただし、真偽疑問文の文末イントネーションについて、検討課題となる現象もあることを述べておく。Kawaguchi et al. (2006)も指摘しているように、真偽疑問文の文末イントネーションは低平調や下降調に限らず、高平調や上昇調が生じることがある。例えば、文中に対比のトピックが含まれる場合、真偽疑問文の文末は上昇する。 (22)は、主語である *Gizem* が対比のトピックとなっており、そこにピッチのピークの顕著な上昇が生じている。これは、「エイリュルもオズゲも来たよ」という相手に対する発話である。

(22) Peki, **Gizem** gel-di *mi*↑
peki ギゼム.NOM 来る-PAST.3sg Q
「じゃあ、ギゼムは来たの？」

トルコ語の真偽疑問文が*-mI* という形態的な標識によって示されているとすれば、文末イントネーションはどのような機能を持つと考えられるだろうか。鹿児島方言と同様に、話者の発話態度を表出するという可能性も検討すべきであろう。これについては、今後の課題としたい。

4.2. 文頭イントネーションについて

日本語の研究において、文頭イントネーションが文タイプを区別するというような方言は今のところ報告されていない。Göksel et al. (2008, 2009)のトルコ語における主張が正しいとするならば、日本語とトルコ語では、大きく異なる仕組みが存在していると考えられる。ただし、近年のイントネーション研究において、東京方言に、トルコ語に類似した文頭のピッチのピークの圧縮現象があることが指摘されている (Hwang 2016)。Hwang (2016)は音響音声学的な分析と、聴覚実験を用いて、それを示している。本節では、東京方言の研究で得られた知見に基づき、Göksel et al. (2008, 2009)が文タイプを区別するとした文頭イントネーションが、それと異なる意味・機能を持つ可能性を指摘する。

Hwang (2016)によると、東京方言では、意味的焦点となる要素を含む文において、文頭からその要素の直前までにピッチのピークの圧縮が見られる。下の例は、「ユウは論文をナオに見せた？」という文に対する回答となっている文である。(23)の意味的焦点となるのは、対比の要素である「メモ」であり、そこでピッチのピークの顕著な上昇が見られる。注目したいのは、「メモ」に先行する「ユウは」にピッチのピークの圧縮が生じるという事実である。

(23) uun, Yuu-wa **memo-o** Nao-ni mise-ta-yo.

(Hwang 2016, p. 120, Table1 より抜粋)

2.1 節で述べたとおり、従来、東京方言では意味的焦点となる要素より後ろにピッチのピークの圧縮が生じることが知られており、多くの研究者が注目してきた。これに対して、Hwang (2016)は、意味的焦点となる要素より前にも圧縮現象が観察されることを新たに指摘している。

更に、興味深い点として、焦点よりも後ろに生じる圧縮については、焦点が疑問詞であっても対比の要素であっても、いずれの場合にも起こるが、文頭から焦点より前に生じる圧縮については、この二つが区別される。対比の要素より前に圧縮が生じることは上述の通りであるが、疑問詞より前にこのような圧縮は生じないとされる。

(24) *Huh? Yuu-wa **nani-o** Nao-ni mise-ta?

(Hwang 2016, p. 120, Table1 より抜粋)

本論文では、トルコ語に見られる文頭のイントネーションは、東京方言と同様に、文中の意味的焦点の導入という機能を持つ可能性を指摘したい。これまで、多くの個別言語の研究によって、文中の意味的焦点は音声的に卓立するということが明らかになっている。トルコ語におけるピッチのピークの圧縮も意味的焦点の音声的卓立の一種であると考えることは不自然ではない。Göksel et al. (2008, 2009)が提示した回答要求文では、疑問詞や*-mI* のホストが焦点となっており、文頭の圧縮は、文中に焦点を導入するという役割を果たしていると考えられる。

また、このような考え方に従うと、3 節で挙げた Göksel et al. (2008, 2009)の問題点についても説明が与えられることを述べる。まず、反語文や間接疑問文などの回答を要求しない文においても文頭に圧縮が生じる場合があるという問題である。これについては、いずれの文にも疑問詞が含まれており、疑問詞が意味的焦点と解釈されるからであると考えられる。そして、回答を要求する文においても圧縮の程度に差があり、圧縮が見られないような場合があるという問題である。程度に関しては、文中の焦点をどの程注目させたいか、という話者の意志と連動している可能性がある。それは発話ごとに異なるのが自然であり、その違いが音声的な実現に反映していると考えることができる。

最後に、東京方言とトルコ語における、疑問詞と対比の要素の区別の有無について考える。東京方言では、両者を区別し、文頭のピッチのピークの圧縮は対比の要素にのみ生じる((23)と(24))。それに対して、トルコ語では両者が区別されず、疑問詞にも圧縮は生じている。これは現在のところ言語間の変異と捉えておきたい[12]。

[12] 同じ意味的焦点であっても、疑問詞と対比の要素が音韻論的に区別される言語とされない言語があることはすでに明らかになっている。焦点より後ろのピッチの圧縮現象について言えば、東京方言や小林方言は後者で、福岡方言は前者である。福岡方言では、文中に疑問詞を含む場合、それより後ろではアクセントの対立が消失するが、それが対比の要素である場合、アクセントの対立は保持される Kubo (2005)。

5. まとめと今後の課題

本論文では、イントネーションの機能のうち、特に文タイプの区別に注目して、日本語とトルコ語の研究を見た。日本語には文末イントネーションによって文タイプを区別する方言と、そうでない方言があることを紹介した。そして、トルコ語には、文末イントネーションが文タイプを区別しているという主張と、文頭のイントネーションが文タイプを区別しているという主張があることを述べ、それぞれに解決すべき問題があることを指摘した。最後に、日本語との比較を通して、問題解決のための可能性を探った。その中で、トルコ語の文頭のイントネーションが、文タイプの区別ではなく、文中の意味的焦点を導入する機能があるという分析案を提示した。

今後の課題は、まず、本論文で提示したこの分析の妥当性を検討することである。具体的には、文頭から始まるピッチのピークの圧縮が回答要求文であることを示す機能を持つのか、それとも、文中の意味的焦点を導入する機能を持つのかを明らかにするための調査・実験を行う必要がある。今のところ、前者にとって問題になる例は、筆者の限られたデータに見られるものである。これが確かな反例となるかどうかを確かめたい。また、後者の分析については、現時点では東京方言における類似の事実に基づいて、その可能性を指摘したに留まっている。これから、この分析が妥当であることを示すために、実証的な検討を行っていきたい。

略号

ABL	奪格	IMPF	未完了	PF	完了
ACC	対格	LOC	位	pl	複数
AUX	助動詞	NEG	否定	POSS	所有接辞
COMP	補文標識	NOM	主格	Q	疑問
DAT	与格	OPT	希求	sg	単数
GEN	属格	PAST	過去		
IMP	命令	P.COP	過去のコピュラ		

参照文献

Göksel, Aslı, Meltem Kelepir and Aslı Üntak-Tarhan (2008) The morphosyntactic implications of intonation as a clause-typer. In Cedric Boeckx and Süleyman Ulutaş (eds.) *Proceedings of the 4th Workshop on Altaic in Formal Linguistics*, 39-50. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.

Göksel, Aslı, Meltem Kelepir and Aslı Üntak-Tarhan (2009) Decomposition of question intonation: The structure of response seeking utterances. In: Janet. Grijzenhout and Barış. Kabak (eds.), *Phonological Domains: Universals and Deviations*, 249-286. Mouton de Gruyter.

Hwang, Hyun Kyung (2016) The role of pre-focus compression in Tokyo Japanese. *Phonological Studies* 19, 117-124.

Igarashi, Yosuke (2006) Dephrasing in Kobayashi Japanese: Is it a Reality?. *Proceedings of the 126th Conference of the Linguistic Society of Japan*, Hokkaido, 53-8.

Ishihara, Shinichiro (2003) *Intonation and interface condition*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Kawaguchi, Yuji, Selim Yılmaz and Arsun Uras Yılmaz (2006) Intonation patterns of Turkish Interrogatives. In: Yuji Kawaguchi, Ivan Fónagy, and Tsunekazu Moriguchi (eds.), *Prosody and Syntax Cross-linguistic Perspectives*, 349-368. Amsterdam: John Benjamins.

川上秦 (1963)「せりふの抑揚」『言語生活』137. 66-71.

木部暢子 (2000)『西南部九州二型アクセントの研究』東京: 勉誠出版.

木部暢子、久見木大介 (1993)「鹿児島市方言の質問のイントネーションについて」『鹿児島大学法文 学部紀要人文学科論集』38, 19-34.

金田一春彦 (1951)「コトバの旋律」『国語学』5. 37-59.

小西いずみ (2016)『富山方言の文法』東京: ひつじ書房.

郡史郎（2003）「イントネーション」上野善道編『朝倉日本語講座 3 音声音韻』109-131. 東京: 朝倉書店.

Kubo, Tomoyuki (2005) Phonology-syntax interfaces in Busan Korean and Fukuoka Japanese. In: Shigeki Kaji (ed.) *Cross-linguistic studies of tonal phenomena: Historical development, tone-syntax interface, and descriptive studies*: 195-210. Tokyo: ILCAA.

仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』東京: ひつじ書房.

佐藤久美子 (2005) 「小林方言の「一型アクセント」はどのように実現するか」『九州大学言語学論集』25・26 合併号. 163-187.

佐藤久美子 (2011)『小林方言とトルコ語における音調の研究ー「一型アクセント」はどう実現するかー』博士論文. 九州大学.

佐藤久美子 (2013) 『小林方言とトルコ語のプロソディーー一型アクセント言語の共通点ー』福岡: 九州大学出版会.

On the Functions of Intonation in Japanese and Turkish: Focusing on Sentence Types

Kumiko Sato
satok@ninjal.ac.jp

This article considers functions of intonations in the interpretation of sentences in Turkish and Japanese. There are two previous analyses for the interpretative functions of intonations in Turkish: (i) sentence types are associated with sentence-initial intonations, and (ii) they are associated with sentence-final intonations. This article examines these two analyses and points out some empirical problems with the second analysis. Furthermore, this article shows, in comparison with some Japanese dialects, that sentence-initial intonations in Turkish serve some function that introduces foci to the sentences.